

ドローンの可能性

ハチが飛ぶような音をたてて、ひらりと機体が舞う。空中で留まるだけでなく、高度を変えたり、旋回させたりして縦横無尽に移動させることもできる。人が遠隔操作で飛行させる機器、ドローンだ。もともとは偵察といった軍事目的で開発されたドローンだが、近年では活躍の場が広まりつつあり、注目を集めている。

ドローンの用途は多様だ。空撮だけにとどまらず、農薬散布や測量、インフラ点検にも用いられている。あくまでドローンは空中を飛行するだけの機器。そこに搭載させるものによってドローンの働きは異なるのだ。

ドローンを使うことで、それまで人が行っていた作業をより効率よく、低コストで行うことができるようになる。そのため、近年ではドローンを運用する企業や法人も増えてきているという。ただ、ドローンを操縦するのはそれほど容易ではない。過去には墜落や接触事故なども起きており、安全性を疑問視する声もある。それに対し、NEC フィールドディング(株)の湯城大輔氏はこう語る。「ドローンの事故の主な原因は操縦士の技量・知識不足によるものです。」ドローンの性能はどんどん改良されている。だが、事故を防止するためには、ドローンの性能を向上させるだけでは十分ではない。操縦士も適切な訓練を受け、技量を向上させる必要があるのだという。

そこで、NEC フィールドディング(株)では、ドローンを購入した企業や法人へのアフターサポートに力を注いでいる。機体に故障や劣化がないかを確認する点検。操作を安全かつ的確に行うための実技訓練。さらに、天候の変化やGNSS（GPSなど）環境といった、ドローンの運行に影響を及ぼしうる要因を教える座学もある。ちなみにドローン操作の講習会は全国各地で開催され、自治体の施設や、文部科学省の廃校施設の有効活用プロジェクトで地方で廃校になった学校の体育館、校庭などを利用して地域活性化も促進しているのだ。

十分な技量・知識を身につけた操縦者が適切に用いれば、安全かつ有用に活用できる機器、ドローン。今後は土砂崩れ・橋の決壊などを未然に防ぐための空撮、構造物点検や、荷物の配達、獣害対策といった分野での開発も進められるという。ドローンのさらなる飛躍に目が離せない。

ライター：神保嘉寛、三浦元吾
エディター：三浦元吾

編集後記

今回のドローンの記事では、新しい視点からドローンについて知ることができた。また、ドローンの将来性をも感じることができた。

神保嘉寛

人類もまた科学技術の発展に後れをとってはいけなと感じた。

三浦元吾